

獨逸史學の二大百年記念 (上)

文學博士 坂 口 昂

ことし一九二四年、ドイツ史學は二大百年記念を壯んにすることが出来る。

そも、現代のドイツ史學の起源はアウフクレ
ーリング及び殊にローマンチックに負ふ所である。アウフクレーリングは理性主義及び古典主義の卓越したものである。隨つて理性が勝つてゐたから、歴史を道理化して考へ、是非曲直を判定し有罪無罪を宣告する宛ら裁判所の如くに心得、又た古典にあこがれたから、文献的テクニクに長じて來た。之に反してローマンチックが起つた。

このものは自己みづからを反省し、民族の發展に重きをおき、國家の建設を目的とした。これがた
めに前者の短所を去つてその長所を採つた。即ち
上に述べた裁判所の見方を排斥し、國民の發展と
いふ風に歴史を見立て、之にかの文献的テクニッ
クを結びつけてその實行手段とし、研究の對象を
古代から中古及び近代に移すことにした。かくの
如きアウフクレーリング及び之につゞいたローマ
ンチックといふ思想の流から、ドイツの史學は養
成されて盛んとなり、延いて全世界に於けるそれ

の勃興を促すやうになつたのである。

さてこの發展の階段を標識するドイツ史學史上の産物の一つにして、恐らくはその極めて少數なる逸品に數へらるべきものは Monumenta Germaniae Historica であらう。このものが正さしく百年記念を享くべき時に際會しつゝあるから、私は茲に諸君と共にしばらくこれが概觀を試みたい。

凡そ物の發展には、多かれ、少かれ、その先驅者のないものはない。MGHの遠き淵源はさておき、直接先驅は上述の兩精神界の境目に立つてゐた歴史家ヨハンネス・フォン・ミュルラ（一八〇四年プロシアの史官となる。一八〇九死）であつた。彼は既にスウィス同盟史の著者として有名であるが、この場合に於て彼を偉とすべきは、ドイツの不幸の眞最中（一八〇五、一八〇六年）國史研究のため、その根本史料編纂の計畫を立て、之を發表し、後の斯業を喚起したのである。

然らば、かくの如き事業の實行者は果してローマンチック直屬の人であつたか。否な、そは全くかくの如き思想界の人にあらずして、實は徹頭徹尾實際的政治家たるフライヘル・フォム・スタインであつた。この人は、申すまでもなく、自由戦役の原動力の主要部を形作り、戦役の進行中一時は宛ら無冠の王帝たるの位置を占めたこともあつた。

この英雄は、一朝頭を回らして學問界に向つた。時は一八一五年の五月末つ方である、ドイツに取りては恢復の喜びと、その不完全さの悲みと相半ばする結果を生み出したウィーン會議から、スタインはナツサウの故郷に歸臥した。彼が之を境目として、翻然自家の生活の一大轉向を行はなければならなかつたのは、世界史的運命が齎らした悲劇であつて、而も吾が史學の將來に取りては、偶一個の福音を齎すべきよき日の始りであつた。之に先ちて、スタイン（一七五七—一八三二）の

出身及び體驗が如何に歴史の學問に關係する所あつたかを回顧してみよう。彼は一千年の歴史を負ふ所謂帝國騎士團の出身である。實にライン河畔の傲慢な武士の一人であつた。彼には何等の専門的素養はないが、學問のうちで尤も歴史を好むだ。

さきに閑あつた時、大革命を起したフランス國民の起源及び發達に興味を喚起し、史籍獵涉の結果、自ら其歴史を書く試みをしたことがある。最近には、自分の家庭で先づ彼の長女、次には二女の教育のためクラスを作つて、自分の勉強の結果から材料を取出して歴史を教えた。この際は恰も獨佛關係の盛衰浮沈の變化甚しい時であつたから、スタインの歴史教育は之を好材料として取扱つた。

既にして戦役の結果、ドイツが救ひ出されたと共に、ドイツの歴史士位置如何といふことを娘たちに話す必要が痛切に感ぜられたから、スタインはその史料を探り又は買入れたが、どうも十分なも

のを得られなかつた。そこで思ふた。イタリアではムラトリ、フランスではサン・モール學林によつてそれ／＼大集成が出来てゐるのに、何故にドイツにはそれがまだないのであるかど。因つて、彼は故ミュルラが提唱した計畫書を讀むで知つてゐたから、その實現の今更ら急務なることを痛感した。之を要するにスタイン男のウイーン會議後の生活は、それまでの、彼一身の出身からいつても、その家庭に於ける體驗からいつても、十分に歴史の學問に向ふ内的衝動を有つてゐたのであつた。

然れども、この英雄回頭即神仙的轉向の最大動機が矢張國民的政治的であつたことは争はれない何となればスタインは國民的政治家である、かくの如きものとして、一八〇九年の風雲躍動の際、國民の國家恢復の運動と精神界の勃興とが兩々相俟ち相援けて、如何に有功であつたかは、親しく

體驗した人である、然るに今やこの國民的政治家としての生涯はその幕を閉ぢ、全然閑地に就かねければならぬ、而も元氣尙ほ衰へない、そこで、かねてから興味を有するドイツ史學のために、何等かの事業を起して、せめて國民の精神喚起の一助でも提供したいと考へ、遂に之を以て自己晩年の使命と自覺するに至つたのは、極めて自然なる道行であつたからである。この行き方は、猶ほゼスイタの教祖イグナチウス・ロイヨラ一旦戰陣の間に傷いて不具となるや、鬱勃たる政治及軍事界の功名心を宗教界に轉じたのに、さも似てゐる。一八一八年七月、スタインがヒルデスハイム監督に與へた手紙に「公の境涯から隱退した以來、私がかひたすらいそしむでゐるのは、ドイツの歴史に對する趣味を喚起し、その根本的研究を助けて容易にし、これによつて吾々共通の祖國に對する愛と吾々の偉大なる祖先の記憶との維持に貢獻せば

やとの願望ばかりである。この私の目的は、一八〇三年の變動（レーゲンブルグ議會のドイツ帝國改造決議による。スタイン自らも實にこれによつてその世襲騎士領を沒收されてゐる）によつて散逸した幾多の貴重な古文書を入念に蒐集し、その隱滅に歸しないやうに保存法を實現するにある。しかしこの目的成就には、個人らの決意だけでは十分でない、主として諸國政府が之に對して如何なる態度を執つてくれるかに係つてゐる」とある。又この目的の協會が成立した當初から、それが採用したモットーは聖き祖國愛は元氣を振作す (*Sancius amor patriae dat animum*) とある。以てスタインの志の那邊にあつたかを見るべきである。然らばこのMGとなるべき一大事業につきてスタインの考案は何時始めて吾々に打明けられてゐるか。それは彼のウイーンから隱退して間もな一八一五年の夏七月のことであつた。自由戰役

に於けるドイツ精神の鼓吹者アルシトは再びフランス人の手から恢復されたラインの眼ざしたるケルンに赴き居り、戦後のラインランド地方に於けるドイツ精神再造のため、「フハト」といふ紙上で宣傳の筆を揮ふことになつてゐる。この時偶機會ありて、かのローマンチック界の巨擘ゲーテは彼の故郷フランクフルト方面に參り、ウイスバーデンに湯治し、轉じてスタインの故郷を経て、彼の會遊の地の山川を吊ふべく、ライン河畔にそうて下つた。スタインはゲーテをその途で要して一旦欸留し、遂にナツサウからは相與に同乗ドライブして一緒にケルンに入つた。この一代の政治家と千古の思想家との組み合せは、實に異彩を放つてゐた。一日兩人は相携へて大伽藍に參詣した。この瞬間にアルントは突然スタインからの招に應じて、偶ケルン通過中のアイヒホルンと共に大伽藍に赴きみれば、ローマンチック大詩人はこの偉大

な寺觀をば、ドイツの藝術として徐ろに賞鑑して或は正面から、或は内部から、或は一周して低徊去る能はず、衷心ひそかに、その數世紀間に長引ける建築の未完成を惜むでゐた間に、自由戦役の元勳政治家は同じものをドイツの歴史に屬するものとして且つ眺め、且つ心中に燃え立つ今昔感を回らして居たらしい。スタインの胸中のイデーが吾々に打明けられたといふのは、このゲーテとライン同遊中であつた。實にゲーテの傳ふる所によれば、この時、スタインは詩人に向つて、自己の今後の仕事は古きドイツ史建設のために一個の協會を發起創立するにあると物語つたのである。

しかしこの協會創業の如何に困難であつたか、吾々少しく詳しく説いてみる必要がある。

上に述べたドームで落合つたアイヒホルンといふのは、有名な法制史家の父である。彼はさきにスタインの戦役時代の戦時行政の同僚で、今はプ

ロシアの高官で、恰も外交事務で巴里出使の途上にあつた。この舊友から、スタインは目下伯林にも同じ計畫が催されてゐると聞いて大いに喜んだ。實にそこには中古羅馬法の歴史的研究で既に有名であつたサグイニが居つて、故ミユルラの計畫を襲ぎて、史料蒐集及び編纂の企の中心となつてゐた。スタインはこの企に共鳴し、自分の意見をアイヒホルンを通して伯林に傳へしめた。そこで伯林の學界は氣色ばみ、早く之を物にせうといふことになつた。彼等は急ぎ込んだ。彼等はスタインと熟議せず、自分等だけで計畫實行を試みた。即ちサグイニの外には、學者側では羅馬史家ニーブール等、政治家側ではアイヒホルン等、各多數の名士を催ほし、案を立て、一同連署して首相ハルデンベルグへ請願した。日附は一八一六年五月三十一日である。この計畫が如何に廣汎に互るべき筈であつたかは、主催者サグイニの胸中で

歴史家でない、かのゲルマニストたるグリム兄弟が、總務部のセクレタリアトに擬せられてゐたことで分明する。ハルデンベルグは賛成を表した。この間にスタインは南ドイツに向て運動し、單獨にこの伯林案の實現に努力した。それでこの案は當時頗る有望と考へられた。今後は只だプロシヤ首相の上奏によつて王室の御賛助を得ること、それから創立委員が任命されて諸國に向つて勸誘狀が發せられることだけが残つてゐた。然るにそれ以後は行きづまりで、頓と進行せず、その原因が何邊に在るか今に不明である。ともかく請願後數個月の内に、折角有望であつた伯林案の實現が到底駄目であることが、明かになつた。

是に於てスタインはプロシヤから何等の援助も期しがたきを知り、今は一人として自ら事業創立の任に當るに決し、主としてドイツ國民の社會に信賴し、自分も私財を擲ちて目的を遂げやうと

思ひ立つた。由來剛毅不撓の人物であるから、盤根錯節に當りても屈せず、銳意目的を遂ふた。この目的のために、一八一七年十一月以來、フランクフルトに寓居を卜した。それはこの地が、獨立のドイツ市であつて、南北ドイツの中央にあり、今はウィーン決議により聯邦會議の開催地であり經濟上からも政治上からも極めて肝要にして便利なる位置を占めてゐたからである。スタインはこの市から一方はこゝへ往來しこゝに滞在する聯邦使節たちの間に向つて、他方はドイツの南と北とに向つて運動し、殊に北方には、彼の政治上生涯からいつても個人生活からいつても彼と因縁淺からざるウエストフアリア方面に向つて、宣傳に努め、所在の然るべき個人に向つて資金の寄附を勧誘した。それで全二年間努力の結果、寄附金は應募者スタインともで僅に五名で、合計一三三〇〇グルデンであつて、全三〇、〇〇〇グルデンの半

ばにも達せず、その内の最高寄附者はスタインその人で三〇〇〇グルデンを出してゐる。勧誘をうけた多くの人は斷つて來たのだ。かの前段に讀み上げたスタインの書面の宛名の人ヒルデスハイムの監督もその一人であつた。その他に、斷つた僧侶の一人の如きは、その理由として、變手古なことを言つてゐる。曰く、どうせ、グレゴリ七世に關する論難攻撃の論説をも出版するだらうから、こんな企に參加しては大本山羅馬から非難されようといふのである。以て如何に當時の人心が狐疑逡巡してゐたかを推想するに足る。かく初發が失望的であつたに拘はらず、スタインは斷然事務所を開いた。それはバーデンの官吏ビュヒレルを庶務に、同じバーデンの官吏でハイデルベルグの司書官にして多少古文書に通ずるデュムゲを編輯にフランクフルトの一銀行家を會計に、各囑托したさうして聯邦使節の内から、可然人を指名囑托し

て四人の名士を得て、自分と共に五人で總務部を組織した。最初オーストリア及びハノフェルの使節にも依頼したが本國政府の都合上から斷られた。それで四名士といふのはバヴリア、ウウルテンベルグ、バーデン、メクレンブルグ四國の使節であつた。プロシアの使節は入つてゐない。いよ／＼

發會といふ段取となつて、スタインは自分の寓居に於て、以上の關係者を招きてやゝ形式的に會則を議し、然る後に小宴會を催はした。この宴會にはプロシアの國務大臣ウイルヘルム・フォン・ポルトも招かれて列席し、會の首途を壯にした時に一八一九年一月二十日であつた。これがMGとなるべき事業の形式的創立である。この會は名づけて「古獨逸史料編纂協會」(Gesellschaft für ältere deutsche Geschichtskunde = Societas aperiendis fontibus rerum Germanicarum) といふやうして上に引用した「聖き祖國愛は元氣を振作

する」といふ拉丁言を協會のモットーとしてゐる所謂古ドイツとは紀元一五〇〇年までと定め、即ち世界史の中古時代におけるドイツの謂である。それはドイツが新舊兩教會に分れるやうになつては史料蒐集編輯上の意見衝突が起りさうであるからである。

しかし發會式が擧げられたからとて、當時この協會は外的から見ても、內的から考へてもまだ極めて不完全なものであつて、何等の眞の創立が出来たとは申されない。これから五年間は尙ほ混濁たる有様であつた。例へば外的から見ても、發會當日の會員はすべてで十名に過ぎなかつた。その年の夏になつて名譽會員と特別通信會員とを推薦したが前者は三名でオーストリアのヨハン大公、バヴリア太子ルードヴィヒ、及びメツテルニヒ之に推され、後者は五十七名で、諸國の學者が指名された。これから三年間、毎年引き續きて協會は聯邦

會議に援助の請願をし、會議はその度毎に之を採用して諸國政府に向つて出来るだけの保護と便宜とを與へられたしとの、形式的勸告を繰り返したけれども、大した反響が起らなかつた。かゝる計畫に最も理解あるべき筈のプロシヤすら、その三年目に始めて若干の出資を許し而も先々は毎年詮議するといふ極めて不定な援助を約しただけで、南ドイツ諸國は一層躊躇し、オーストリアの如きは問題にならなかつた。こゝでは最初その聯邦使節はメツテルニヒに向つて、スタインの計畫は危険である、彼自らが他人に知らさずに、ひとり秘密の政治上目的を包藏してゐる、それは諸國の君主權を破壊するために歴史上の證據を探り、その結果、各國の階級、即ち貴族や町人や人民の自由獨立を主張せうと考へてゐるのだ、證據といふのは中古に於て當時未だ君主權は確立してゐなかつたのを時と共に諸階級から權利を僭奪して作り上げ

られたといふ證據だ、この證據を協會の手で探し出さうとスタインがひとり密かに目論見で居る。これが當時の保守政策の大本尊たるメツテルニヒに報告されたのであるから、オーストリアがこの計畫を喜ばなかつたのは尤であつた。ハーデンベルグの下にあるプロシヤといへども、實は矢張五十歩百歩であつた。何せならば、この頃反動の風潮勃興し、協會の發會の年、ツルンの元祖ヤーンは禁錮され、有名なカールスバードに於ける諸國の協議によつて、大學や、出版や、ツルンを中心とする自由主義の運動を嚴重に取締ることが決議されて勵行され、諸國の政治家が非常に臆病になつてゐたからである。現に協會自らの側でも頗る慎重な態度を取り、苟も自由主義のものは勿論、その疑あるものは入會せしめないやうに取計ふてゐた。例へばかのアルトンの如きはスタインに信任され、この事業の起りを賛助した有力者である

に拘はらず、時局に於ける嫌疑者の一人として、かの特別會員指名の内から省かれた。當時自由主義者として有名であるフライブルグの歴史家ロテックも亦た除外され、ツルンの熱心家マースマンが一八二四年春自ら入會を申出たが、曾てワルトブルク祭に参加したといふ廉で謝絶されてゐる。それで協會は政府側からは民主的だと疑はれてゐる上に、自由派からは保守的だと考へられ、中古の史料を集めて實は封建制度の復興を謀るのだと誣ひられた。それ故に協會の發會當初の立場は頗る困難な境遇にあつたのである。

それにも拘はらず、協會が辛くも自ら維持して發會後五年間の難關を切り抜けて、遂に眞の成立を見るまで發展し得たのは、全くスタインの聲望と努力と見識との賜であつた。彼はこの五年間一冬を除いて、毎年の冬期五六ヶ月間は必ずフランクフルトに留りて熱心に會務を見た。當時既に六

十歳を過ぎた老人が、曾てアンチナポレオン時代の政治家として國家の務に忠實であつたが如く、同じ深い責任感を以て、この老後に於ける國民的職業に一身を捧げたのは驚歎すべき悲壯なことはなげねばならぬ。殊に感すべきは、彼の奮闘は單に事務ばかりでなく、當面の學問的方面にも向けられたことであつた。彼はその獨學的歴史の素養を基礎として、史料となるべき古圖書や古文書に勉強し、その分らないものは編輯主任デュムゲに尋ねて、自ら調査を進め、又デュムゲが書いた學問上の意見書を辛抱強く一々読み、自分で出来るだけ獨立の知見を作るに努めた。殊に注目すべきは羅馬末路の記者ヨルダヌスや、ランゴバルドの伊太利史を書いたパウル・デアアマヌスやが果してMGのうちに収録さるゝ價值あるや否やにつきて、彼自ら一々本文を讀破して判斷を下し、いづれも採用に決したことである。又たデュムゲ

が最初立案して諸方に發表した收録史料豫定表が他方面からの注意もあり、旁々次第に不十分であることが分つたから之に追加増補して豫定表を完全にするために、彼自らも自家の藏書中から調査して追加すべき圖書を發見し、又は他の圖書館や文書館を探訪した。殊に上に述べた一冬（一八二〇—二一年）は保養のため南方に旅行したのであるが、その途すがら或はスウイスに於ても或は羅馬に於ても、自分の名聲を利用して所在の官公衙の書庫探訪を許され、それから圖書を借受け又は謄寫するに努めた。

かくて發會後の最初の五年間は財政上の困難と諸方面からの不信用といふ障碍の外に、學問上仕事の際に於ても、協會は四個の困難な問題を控へてゐた。第一、デユムゲのプログラムが上述の如く不十分であつたから、出版のプランの改善確定を要すること、第二、その仕事を部署して割當て

然る後にそれらを一つに纏めること、第三、ドイツ及び外國に於ける文書館等所藏の文書の一覽表を作製すること、第四、是等の諸文書を相互比較することである。それで、是等の問題のために諸方の學會、例へば伯林の學士院の如き、又は諸方の有志家や學者たちからの意見、勸告、報告を集めること、協會の役員を諸方に派遣し、又は所在の學者に囑託し、以て内外各地の史料探訪に従事せしめる、例へば巴里、倫敦、ウイーン、羅馬の如き、これからの一々の報告を集めること、その他、協會の動靜を世間に報道すること、是等の準備事業のための機關として *Archiv der Gesellschaft für ältere deutsche Geschichtskunde* が不定期に發刊されることになつた。

この際、地方からの寄書家のうちにゲーテがあつたことは見逃すことは出来なからう。この詩人は協會發會の年の夏の末、満七十歳の誕生を祝ふ

たから、會は之に名譽會員を贈つた。ゲーテ之を徳とし、會則によれば報告の義務ありといふ條件を忠實に守りて、最初の若干年の間は時々協會に向つて通信を送つたのは面白い。しかしながら、それよりも一層重要な否、會の將來に取りて最も重大なる關係を持來らすべき事件は、ベルツに南方へ出張調査を囑託したことである。これはハノーヴェルの人、(一七九五—一八七六)、ゲツチングン大學で有名なヘーレンの指導の下に、マール・ドームズに關する論文を書いて賞賛を博し今大學を出たばかりの若いドクトルである。スタインは之を抜擢してウイーン及びイタリアへの調査旅行に上らしめた。この青年史家はその英國風な敬愛すべき人物と文献的批評に長ずる學才とを以て、到るところ當局の好感を博し、例へば羅馬では當時同地駐在公使となつてゐるニーブールに愛され、その周旋によつて法皇廳に近づき、先年

のスタインよりも可なりより自由にワチカーノ文書利用の便を得たが如き、その結果、多大の土産を收めて歸國し之を報告した。そこで之より先から、スタインは編輯デユムグの能力の不十分なるを認めてゐたから、茲に之を罷めてベルツを以て之に代へた。又その際フランクフルト人でペーメルといふ眞面目で學問好きの青年があつたから庶務を交迭して之に代へ、尙ほかねて編輯にも參與せしめた。之よりベルツはハノーヴェルに在りて編輯を主裁し、ペーメルはフランクフルトに留りて庶務を視、傍ら中古の皇帝の公文書のレジスタールと稱する綜覧目錄を大成した。これら二人は今後M.G.H.の事業の柱石となるべきであるかくの如くして史料出版は先づ著作者、法令、公文、書簡、古事の五門に分ちて編輯するといふ大綱が確定した。時に一八二四年の春のことであつて最初の發會から數へて滿五年の幾月を要し、茲

に古獨逸史料編纂協會のM G H出版事業は眞實の意味に於て創立されたのである。この時スタインは六十八歳、ベルツは甫めて二十九歳。

之より以後スタインの死する一八三一年までの七年餘りの歲月は、スタイン及びベルツの統裁時代であつた。この間、先づ一八二五年の春、ベルツが編輯主任になつてからの最初のアルヒーヴである第五卷が今度はハノーヴェルから出て、その外觀内容とも前任者時代のものに比して、全く面目を一新し、協會の事業の早くも非常に進行しつゝあるを示した。果して翌一八二六年には、M G Hの第一卷として、その著者第一冊（カロリング時代）が同じくハノーヴェルから出版されて、スタインの許に送られた。男爵の喜びは譬へやうもなく、ウイーン會議から隱退以來の彼の宿志が十一年目に始めて酬ゐられた譯であつた。而して學者間の批評も一般に良好で、かゝる文献的出版に

對する當時の權威たるステンツェルはその著フランクエン家皇帝史の第二卷緒論に於て之を激賞し、殊にニーブルは書面をベルツに送りて慶賀して曰く「余は時代の誇を貴下に於て見る。貴下によつて、これまで吾々先輩が前進させえた學問の境をば、尙ほ一層多く前進させ得たればなり。余は只だ貴下に冀ふ、貴下の學的事業の繼續の外に貴下の舊友たる余が羅馬史を書きたるが如く、わがドイツ史を書かれ、而して余をして之を目のあたりに見せしめられんことをのみ」といつてゐるこのベルツの成功は即ち之を拔擢任用したるスタインの成功であつた。而して彼の死の前年一八三〇年にはM G 第二卷として著者第二卷が出た。自由戰役の政治家スタインは満足して永眠に就いた唯だ一つの悲劇は、彼が生前に於て運動して終に獲られなかつた聯邦の諸國政府からの補助金が、彼の死後三年に至つて始めて許與されたことであ

る。しかし之によつてスタインの遺業はベルツ及びベーメルの二人の提携統率の下に繼紹され、ま
すく進行したのである。初めかの發會式に參列
した聯邦使節である總務部の一人は、當時、この

事業の完成には十年乃至二十年を要すと見込むた
のであつたが、それは非常な空想であつて、百年
後の今日も尙ほ依然繼續してゐる。この長き史料
編纂事業は、かの前に述べたイタリアのムラトリ
やフランスのベネデクテン學僧の物したものでより

も一層廣汎に、徹底的に、模範的に遂行され、史
學研究法の所謂史料分析 (Quellenanalyse) 及び史
料學の補助法たる古文書綜覽目錄 (Regesta) の龜
鑑を垂れてゐる。

¹ Neues Archiv der Gesellschaft für ältere deutsche Gesch-
ichtskunde Bd. XXXXII:

Geschichte der M. G. H. bearbeitet von H. Dresslau,
Hannover, 1921.

² Seeley, Life of Stein and his Times, Cambridge, vol II,
pp. 361

Briefe Goethes, Weimar ausgabe, XXXVII ss. 45. No. 31.

賴 山 陽 の 半 面

北 村 壽 四 郎

一

彦根の儒員であつた中川漁村と醫師の久米道仲

とが共に賴山陽の門に入つた關係や、家老の小野
田小一郎と山陽との間に結ばれた親交から、山陽
は屢彦根に來遊することになつて、未だ世に知ら